

“オシロイダチ *Trichiurus muticus*”として
日本より報告された魚の種名
および和名について

千田 哲資

Comments on the Specific Name of
“*Trichiurus muticus*” Reported
from Japanese Waters

Tetsushi Senta

(Received October 15, 1975)

Kamohara (1940) described *Trichiurus muticus* Gray based on specimens of unknown locality, and Iwai and Hotta (1950) reported two specimens of the fish from the Pacific coast of Shikoku, Japan. Characters of their specimens suggest that they are not *Eupleurogrammus muticus* but are *Tentoriceps cristatus* (Klunzinger). Examination of Iwai and Hotta's specimens confirmed their identity with *T. cristatus* from the South China Sea and the Straits of Malacca. *Pseudoxymetopon sinensis* Chu and Wu from the East China Sea is another synonym of *T. cristatus*. Re-examination is needed on the specific name of *Eupleurogrammus* species inhabiting Korean waters, which has been commonly identified as *E. muticus*.

(Nagasaki University Fisheries Experimental Station, Nomozaki, Nagasaki-ken, 851-05, Japan)

Trichiurus muticus Gray = *Eupleurogrammus muticus* (Gray) の日本人研究者による最初の記録は西朝鮮湾に面する南浦 (旧名、鎮南浦) からである (Mori, 1928; 森・内田, 1934). 次いで内田 (1941, 1964) は朝鮮沿岸における本種の生活史を明らかにした。

蒲原 (1940) は全長 700~900 mm の標本によって *T. muticus* を記載し図を掲げた。標本の産地は明記されていないが、分布域には従来の文献にみられない山口県沖合が加えてある。和名について同氏は“釜山の内田氏の提唱”に従ってオシロイダチを採用した。

岩井・堀田 (1950) は徳島県日和佐沖で漁獲された全長 858, 863.5 mm の2尾のタチウオ科の魚をオシロイダチ *T. muticus* Gray と同定し、日本の太平洋岸からは初記録であり、また従来の記載に不備な点があったとして詳細に記載し報告した。

ところで Klunzinger (1884) が紅海から初めて報告して以来どこからも知られていなかった *Tentoriceps cris-*

tatus (Klunzinger) が、最近相次いで台湾海域と南支那海ならびにマラッカ海峡とから、それぞれ楊 (1974) ならびに Senta (1975) により報告された。そして彼らは、蒲原 (1940) および岩井・堀田 (1950) が日本から報告した標本はともに *E. muticus* ではなく *Tentoriceps cristatus* であるとした。しかしそう判断した根拠について、楊は“Klunzinger (1884) と Tucker (1956) の論文をしらべてみると、上記の Kamohara, 岩井・堀田および筆者らの標本は、すべて Klunzinger (1884) の命名した *Trichiurus cristatus* とよく一致する”と述べているのみであり、Senta もこの問題に関しては別報で論じるとした。

また、楊 (1974) はオシロイダチをもって *T. cristatus* の和名としたのに対し、Senta (1975) はカンムリダチを提唱し、オシロイダチはそのまま *E. muticus* の和名として保存した。

以下、蒲原ならびに岩井・堀田が“オシロイダチ *Trichiurus muticus* Gray”として日本から報告した魚の種名について検討するとともに、その和名についても論ずる。

種名について。オシロイダチ *E. muticus* とカンムリダチ *T. cristatus* はともにユメタチモドキ亜科 (改称)* *Lepidopodinae* に属し、腹鰭を有し、側線は胸鰭上方でゆるく下降して肛門の位置で体高の下側 1/3 よりかなり上を走り、鰓蓋の遊離下縁は外方に丸くふくらむなどの特徴を有する。更に両種に共通する特徴として、尾鰭は成魚においては少なくとも外見的には認められず体の後端は一点で終る、臀鰭は1個の鱗状片に変形した棘のみが明らかで他の鰭条は皮下に埋没して痕跡的に存在する、頭部背郭に沿って冠状の隆起 (sagittal crest) があり眼隔部は突出する、などが挙げられる (Tucker, 1956; Senta, 1975)。

上記以外の諸形質についてオシロイダチとカンムリダチに関し従来の主要文献から要約し、蒲原および岩井・堀田の“オシロイダチ”と対比させると Table 1 のようになる。表のうち括弧に入れた数字はもとの文献では別の表現がしてあったものを統一するために換算したか、あるいは記載のなかったものを図から推算したことを示す。オシロイダチについての Gray (1831) の原記載

* 従来 *Lepidopidae* (正しくは *Lepidopodidae*) の和名にはタチモドキ科が用いられてきたが、タチモドキの種名が *Lepidopus tenuis* から *Benthodesmus tenuis* と変えられるとともに、その所属も *Trichiuridae* の亜科 *Aphanopodinae* に移された (Tucker, 1956)。従って *Aphanopodinae* をタチモドキ亜科、*Lepidopodinae* をユメタチモドキ亜科とするのが良いと思う。

Table 1. Taxonomical characters of *Eupleurogrammus muticus* and *Tentoriceps cristatus* given by various authors. Values in Gothic type are for Gray's holotype of *Trichiurus muticus*. Values in parentheses are either calculated from other expressions or estimated from illustrations of papers.

Species	<i>Eupleurogrammus muticus</i>		<i>Tentoriceps cristatus</i>				
	Author	Day 1878	Tucker 1956	Kamohara 1940	Iwai & Hotta 1950	Klunzinger 1884	Senta 1975
Species name given by the author	<i>Trichiurus muticus</i>	<i>Eupleurogrammus muticus</i>	<i>Trichiurus muticus</i>		<i>Trichiurus cristatus</i>	<i>Tentoriceps cristatus</i>	
Total length (mm)	512.5	426 , 617	700~900	858.0, 863.5	?~418.5	283~633	
Locality	India	India and unknown	unknown	Pacific coast of Shikoku	Red Sea coast of Egypt	South China Sea and St. of Malacca	
In total length:							
Head	10.5~11.5	10.3 , 11.2	10.0~11.5	10.2, 10.4	9	8.8~10.6	
Depth of body	16.0~16.5	14.7 , 15.4	15.5~17.0	18.8, 18.9	20~24	17.2~24.1	
In head:							
Eye	6.5	7.0 , 7.9	6~7	5.9, 6.2	5 or 6	5.1~6.1	
Snout	(3.2)	(2.9)	2.6	(2.8)	(3.8)	2.5~2.9	
Pectoral fin	3.0	(2.8)	(4.3)	4.7, broken distally	(5.3)	4.5~6.4	
Height of head	2.0	(1.8)	(2.0)	(1.8)	(2.6)	(2.0)	
In body depth:							
Longest dorsal ray	2.0	(2.0)	(1.5)	(1.3)	—	(1.5)	
Count							
Dorsal	140~150	III, 143 ~147	120~150	142, 143	ca.120(?)	V, 126~144	
Anal	—	i, I, 120 ~121	—	—	—	i, I, 82~91	
Vertebrae	—	41+150 ~151	—	—	—	45~48 +105~117	
Gill rakers	—	—	—	8+9	—	2~6+7~11	
Pyloric caeca	—	ca. 24	—	—	—	11~13	
Origin below D.F.							
Ventral fin	(18)	(17)	—	(11)	—	9~12	
Anal fin	—	41 , 42	(47)	(46?)	—	47~50	
Dorsal profile of head at interorbital	slightly concave	slightly concave	convex	convex	convex	convex	

は簡略に過ぎるが、全模式標本は Tucker (1956) によって精査されており、その諸形質を Table 1 ではゴシックで示した。

蒲原と岩井・堀田の“オシロイダチ”は暫く措くとして、Table 1 によると、頭長・吻長・頭高(いずれも相対値)および背鰭条の総数などにおいては両種の間に差がない。しかしオシロイダチはカンムリダチに比べ、i) 体高が高い、ii) 眼が小さい、iii) 背鰭条が短い、iv) 胸鰭が長い、v) 腹鰭が後方に位置する、vi) 臀鰭起部が前方に位置する一軀幹部の脊椎骨数が少ない、など多くの点において両者は容易に区別される。

蒲原の“オシロイダチ”は与えられている諸形質の多

くにおいてオシロイダチとよりはカンムリダチと一致しており、前者により近い値を示したのは体高のみにすぎない。また Fig. 1 にみるとおり、頭部背面の輪郭、眼の位置、胸鰭の先端が側線を越えるかどうか、などの諸点においてもカンムリダチに似ている。更に蒲原 (1940) の図では背鰭第 18~22 条の鰭膜上に縁辺が不明瞭な暗色斑紋が示されているが、南支那海やマラッカ海峡より得たカンムリダチにも全長約 500 mm 以上の個体ではほぼ同じ位置に同様の斑紋が認められる。残念なことに、蒲原の標本は関係記録類とともに 1945 年の空襲で喪失した模様で(高知大学文学部岡村収博士よりの私信)、実物について確めることはできなかった。

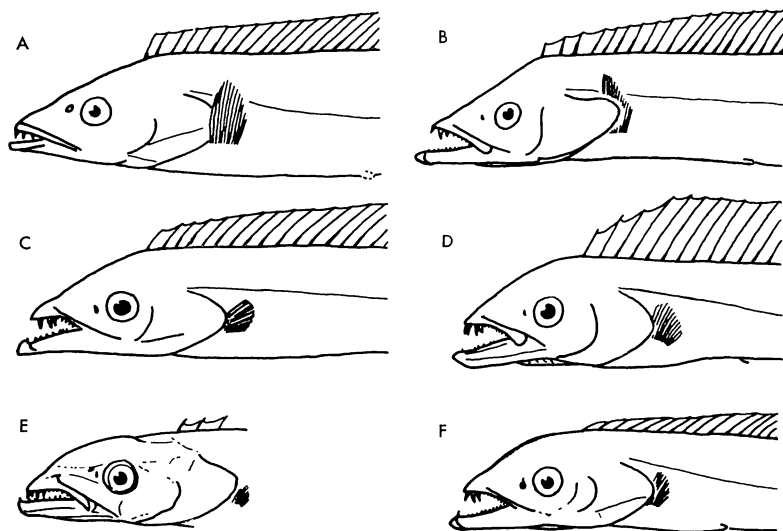


Fig. 1. Anterior part of 6 trichiurid specimens, showing dorsal profile of head, insertion of ventral fin, length of pectoral fin, and length of dorsal fin rays. Partly re-drawn and non-essential parts simplified. A, *Trichiurus muticus*, 20 1/2 inches (512.5 mm) in length (after Day, 1878, reversed, ventral fin is added at 3/4 the length of the head posterior to the opercle); B, *Eupleurogrammus muticus*, 617 mm in standard length (after Tucker, 1956); C, "*Trichiurus muticus*", 900 mm in total length (after Kamohara, 1940, location of ventral fin unknown); D, "*Trichiurus muticus*", 858.0 mm in total length (after Iwai and Hotta, 1950); E, *Trichiurus cristatus* ca. 418 mm in total length (after Klunzinger, 1884); F, *Tentoriceps cristatus*, 540 mm in total length (after Senta, 1975).

Table 1 で明らかなように、岩井・堀田 (1950) の報告した“オシロイダチ”は更によくカンムリダチと一致する。現在これらの標本のうち大きい方は舞鶴市の京都大学農学部水産実験所に (標本番号 FAKU 47813)、また小さい方は徳島県水産試験場に (標本番号なし)、それぞれ保存されている。東北海区水産研究所堀田秀之博士の御好意により、著者は徳島県水産試験場所蔵の標本を調べる機会を与えられた。この標本では腹鰭は第 12 背鰭条下に、臀鰭起部は第 49 背鰭条下に位置し、第 19~21 背鰭条にかけて鰭膜上に暗色斑紋がみられ、幽門垂 12 本、軀幹部の脊椎骨数 49 であった。内部形質の中では第一眼下骨の後下方に小さな第二眼下骨が存在することがカンムリダチ属 *Tentoriceps* をオシロイダチ属 *Eupleurogrammus* から分つ上で最も重要な形質であり、背鰭棘も前者で 5 本、後者で 3 本と異なる。これら 2 点については標本のレントゲン写真によっても確認し得なかった。京都大学水産実験所所蔵の標本では腹鰭は第 11 背鰭条下、臀鰭起部は第 48 背鰭条下に位置し、幽門垂は 11 本である (同実験所中村泉氏よりの私信)。

以上を総合して蒲原 (1940)、岩井・堀田 (1950) がそれぞれ山口県沖? と徳島県から報告した“オシロイダチ

Trichiurus muticus Gray” は実はカンムリダチ *Tentoriceps cristatus* (Klunzinger) であると結論して差支えないであろう。なお楊 (1974) が既に指摘したとおり、朱・伍 (1962) が新属新種として浙江省大陳島近海から報告した *Pseudoxymetopon sinensis* も本種の異名である。

和名について。オシロイダチと言う和名を印刷された報告のなかで用いたのは蒲原 (1940) が最初であって、*Trichiurus muticus* の和名とされているが、記載し図示された魚は *Tentoriceps cristatus* であることは上に論じたとおりである。そのため楊 (1974) もオシロイダチをもってそのまま *T. cristatus* の和名としている。

しかし元来オシロイダチという和名は朝鮮西岸産の、漁民が粉粧魚と呼んでいた魚について、当時釜山におられた内田恵太郎博士が提唱されたものである (蒲原, 1940)。内田 (1964) による朝鮮産オシロイダチの図をみると一他の目的のための略画であるので細かい点是不明であるが一、頭部背面の輪郭はやや湾入し、胸鰭が長く、腹鰭は第 15 背鰭条下にある。すなわちこの魚はこれらの点で Day (1878) や Tucker (1956) の図示した魚 (Fig. 1 A, B) と一致する。このことは更に内田博士が著者に送付して下さった朝鮮産オシロイダチ (全長 372

mm) の写真* によっても確かめられた。日本から報告された“オシロイダチ”が朝鮮産オシロイダチとは別の魚であることに疑いの余地はない。

結局、従来オシロイダチという和名は朝鮮産の *Eupleurogrammus muticus* と日本で採集された *Tentoriceps cristatus* の両者に混用されてきたことになる。そしてその起源からみて、前者にオシロイダチをあてることが妥当であると考えられ、後者は Senta (1975) で名付けたとおりカンムリダチと呼びたい。

E. muticus に対する和名として、他にチョウセンタチノウオ (Mori, 1952) もしくはチョウセンタチウオ Chyung, 1961) が用いられている。しかし、オシロイダチ (内田, 1941; 松原, 1955; 内田, 1964; 三谷, 1965), オシロイタチ (富山・阿部・時岡, 1958; 阿部, 1963), オシロイタチウオ (Chyung, 1961) などと呼ばれている場合が圧倒的に多く、オシロイダチ=*E. muticus* というのが一般に定着した常識となっている。

朝鮮産オシロイダチの学名

前に述べた内田 (1964) によるオシロイダチの図には臀鰭起部と思われるものが第 32 背鰭条下に示されている。略画にも拘らずこの位置が正確に描かれているとすれば、そこに示されている標本は *Eupleurogrammus glossodon* (Bleeker) である可能性が考えられる (Beaufort and Chapman, 1951; Tucker, 1956**). また前述の写真によると眼は頭の背郭に接近して位置し、側面からみた両者間の距離は瞳孔よりはるかに小さい。このことも上述の可能性を示唆する。*E. glossodon* は広く南支那海周辺一帯 (Beaufort and Chapman, 1951) および東支那海の舟山群島 (Tucker, 1956) から報告されている。現在著者の手許には黄海 (北緯 36 度, 東経 123 度付近) で採集された全長 302~350 mm の *Eupleurogrammus* の標本 7 個体があり***, これらはすべて *E. glossodon* と同定された。本種の分布域が朝鮮西岸に及ぶことは大いにあり得よう。朝鮮に分布するのは果して *E. muticus* または *E. glossodon* のいずれか 1 種のみであるのか、あるいは両種ともに産するのかについては今後の研究に俟た

* この写真は Illustrated Encyclopedia. The Fauna of Korea (2) Fishes の plate 185, figs. 863, 864 に使われている。

** Tucker は *E. intermedius* (Gray) の名で呼んでいるが、Wheeler (1969) は Tucker が調べたのは Gray (1831) の模式標本ではあり得ないことを論じ、彼の記載した標本は *E. glossodon* (Bleeker) と同定すべきであり、*E. intermedius* は *E. muticus* の異名であると結論した。

*** 1958 年 3 月に東光丸が採集したもので、東北海区水産研究所堀田秀之博士から頂いた。

ねばならない。そして *E. glossodon* が産することが明らかになった場合、その和名にはチョウセンタチウオをあてたら如何であろうか。

謝 辞

東北海区水産研究所堀田秀之博士からは徳島県産の“オシロイダチ”標本を調べる機会を与えられるとともに、黄海産 *E. glossodon* の標本を頂いた。九州大学名誉教授内田恵太郎博士は朝鮮産オシロイダチの貴重な写真を複写して送って下さった。お二人に厚くお礼申し上げます。台湾省水産試験所高雄分所楊鴻嘉氏、京都大学農学部岩井保博士と中村泉氏、九州大学農学部木村清朗氏、ならびに高知大学文理学部岡村収博士からは情報の提供と文献入手についてひとかたならぬ御助力を頂いたことに心からお礼申し上げます。原稿の御校閲を賜り、数々の御助言を頂いた遠洋水産研究所水戸敏博士と東京大学総合研究資料館富永義昭博士に深甚の謝意を表する。

引用文献

- 阿部宗明. 1963. 原色魚類検索図鑑. 北隆館, 東京, v+36+358 pp., figs. 1~780.
- Beaufort, L. F. de and W. M. Chapman. 1951. The fishes of the Indo-Australian Archipelago. IX. E. J. Brill, Leiden, xi+484 pp., figs. 1~89.
- 朱元鼎・伍漢霖 (Chu, Y. T. and H. L. Wu). 1962. 中国带魚之一新属新種: 中华拟窄带鱼 (*Pseudoxymetopon sinensis* gen. and sp. nov.). 动物学报 (Acta Zoologica Sinica), 14: 219~223, figs. 1~2.
- Chyung, M. K. 1961. Illustrated encyclopedia. The fauna of Korea (2). Fishes. Chung Ang Do Seo Ltd. 861 pp., 240 figs., 311 pls.
- Day, F. 1878. The fishes of India; being a natural history of the fishes known to inhabit the seas and fresh waters of India, Burma, and Ceylon. Vol. 1. Bernard Quaritch, London, xx+320 pp., pls. 1~68.
- Gray, J. E. 1831. Description of three species of *Trichiurus* in the British Museum. pp. 9~10. Zool. Misc. Part 1. Treuttel, Wurtz and Co., London, 40 pp., 4 pls.
- 岩井保・堀田秀之. 1950. 本邦太平洋岸産未記録魚オシロイダチに就いて. 徳島県水産試験場事業報告, 昭和 23, 24 年度: 23~26, figs. 1~2.
- James, P. S. B. R. 1961. Comparative osteology of the ribbon fishes of the family Trichiuridae from Indian waters, with remarks on their phylogeny. J. Mar. Biol. Ass. India, 3: 215~248, figs. 1~15, pls. 1~2.
- 蒲原稔治. 1940. 魚綱・真口亞綱・硬骨魚目・棘鰭亞目・鱧型族・鯖群 (鱈型類ヲ除ク). 岡田弥一郎・内田亨・江崎悌三纂編, 日本動物分類, 第 15 卷, 第

- 2編, 第5号, 三省堂, 東京, vii+225 pp., figs. 1~102.
- Klunzinger, C. B. 1884. Die Fische des Rothen Meeres. E. Schweizerbart'sche Verlagshandlung (E. Koch), Stuttgart, ix+133 pp., taf. 1~13.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索, I. 石崎書店, 東京, iv+xi+789 pp., figs. 1~289.
- 三谷文夫. 1965. たちうお, p. 256. In 岡田要・内田清之助・内田亨監修, 新日本動物図鑑(下), 北隆館, 東京, x+763 pp., 2169 figs.
- Mori, T. 1928. A catalogue of the fishes of Korea. J. Pan-Pacific Res. Inst., 3 (3): 3~8.
- Mori, T. 1952. Check list of the fishes of Korea. Mem. Hyogo Univ. Agr., 1 (3): 1~228, 1 pl.
- 森為三・内田恵太郎. 1934. 補訂朝鮮産魚類目録. 朝鮮博物学会雑誌, (19): 12~33.
- Senta, T. 1975. Redescription of trichiurid fish, *Tentoriceps cristatus* (Klunzinger) and its occurrence in the South China Sea and the Straits of Malacca. Japan. J. Ichthyol., 21: 175~182, figs. 1~4.
- 富山一郎・阿部宗明・時岡隆. 1958. 原色動物大図鑑, II. 北隆館, 東京, xiv+392+lxxxvi pp., 1157 figs.
- Tucker, D. W. 1956. Studies on the trichiurid fishes—3. A preliminary revision of the family Trichiuridae. Bull. Brit. Mus. (N.H.), Zool. ser. 4: 73~130, figs. 1~23, pl. 10.
- 内田恵太郎. 1941. タチウラ的一种 *Eupleurogrammus muticus* の生活史. 動物学雑誌, 53: 89.
- 内田恵太郎. 1964. 魚類の個体発生と進化. 化石, (8): 33~36, figs. 1~4.
- Wheeler, A. 1969. Notes on type specimens of trichiurid fishes in the British Museum (Natural History). J. Mar. Biol. Ass. India, 11: 304~308.
- 楊鴻嘉. 1974. タチウオ類の資源生物学的研究. III. 台湾産オンロイダチ属(新称)魚類の形態について. Uo (23): 5~19, figs. 1~9.
- (851-05 長崎県野母崎町 長崎大学水産学部付属水産実験所)